

「っひ……、」

侑人^{ゆきと}は漏れた声を、慌てて両手で押さえた。捏ね^こられた胸の頂きから淫猥な疼きが走り抜ける。

縁側を挟んだ畳の間に、吐息と衣擦れの音だけが響いている。

開け放たれた障子には^{たいたい}橙の夕陽が透けているが、畳の間は薄暗い。

つい先程の通り雨のせいだろうか。昼間の蒸し暑さが嘘のように、外からの風は冷えていた。あんなに盛んだった蝉の鳴き声も、もう遠く僅かにしか聞こえない。

「んう……っ、……っ」

影の中^{ゆきと}侑人が身を振ると、三人の体温で温^{ぬる}くなった布団の皺がゆるゆると形を変えた。

侑人^{ゆきと}は今日も歳の離れた二人の兄に^{もてあそ}躰を弄ばれていた。背後から^{そう た}蒼太に抱きつかれたまま乳首^{なぶ}を舐^{はるた}られ、陽太に唇を奪われる。来年から大学に通う歳の二人は背も高く、^{ゆきと}体軀も侑人のか細い四肢とは大違いだ。侑人^{ゆきと}は中身も見た目も、まだ少年と呼ぶに相応しい。

人間に囚われた小動物のように、^{ゆきと}布団の上の侑人には逃げ場がなかった。

「声、我慢しなくていいんだよ。侑^{ゆき}」

陽太^{はると}に耳元で甘く囁かれ、侑人^{ゆきと}は細い肩をびくりと震わせた。

「だ…、だって……、兄さま^{にい}…障子開けてるから……っ、外に聞こえる……、」

「だったら俺が…、陽太^{はると}お兄ちゃんがもう一度塞いでてあげるよ」

「!っん” ……う……っ、」

再び顎を掬われ、深く口づけられる。

陽太^{はると}の厚い舌が侑人^{ゆきと}の腔内に侵入し、上顎をぞろりと舐めあげられれば堪らない刺激が背筋を這った。

「おいおい、あんまり侑^{ゆき}を甘やかすなよ」

背後から声がする。

陽太^{はると}とよく似ているが明らかに温度の違う蒼太^{そうた}の声。乳首を弄るのはまだやめてくれそうになかった。

陽太^{はると}と蒼太^{そうた}は双子で、背格好も顔もそっくりだ。

しかし声の調子に現れるように、二人の気質やぱっと見の雰囲気はかなり異なっている。

終始やわらかな物腰でにこにこしている陽太^{はると}に対し、仏頂面で冷酷な物言いの蒼太^{そうた}。蒼太だけが眼鏡をかけているのも、二人の印象をわける大きな要素かもしれなかった。

「声くらい自分で我慢しろよな。これは折檻なんだから」

「…う、あ……っ」

紅く色づいた乳首を指の腹で摘まみ上げられ、上擦った声が漏れる。

体勢上侑人^{じゆう ゆきと}は振り向くことができない。しかし、縁なし^{ふち}のレンズ奥の冷えた瞳を、侑人^{ゆきと}は容易に想像できた。先程からの静かな物言いが、かえって蒼太^{そうた}の冷酷ぶりを強調しているようにも感じられる。

そして蒼太^{そうた}の放った折檻という言葉に、侑人^{ゆきと}の瞳には怯えの色が浮かんでいた。

「も～。蒼くんこわ～い。ねえ侑人^{ゆきと}？」

侑人^{ゆきと}をやっと口づけから解放した陽太^{はると}がよしよしと頭を撫でてくるが、これから二人にされることを思えばそれすらも侑人^{ゆきと}には恐ろしかった。

このような戯れは初めてではない。

両親の不幸でこの家の養子になった五年前から、ずっと侑人^{ゆきと}はこの二人に身を
拓^{ひら}かれ弄^{もてあそ}ばれてきた。それが単なる嫌がらせではないと知ったときの感情をど
う表せばよいのか、侑人^{ゆきと}はいまだにわからない。

家にいるときは常に和服。身の周りのことは使用人がすべてやってくれる。そんな
新しい家のしきたりに慣れるか慣れないかのときに、二人の兄はいとも簡単に
大人の目を盗み侑人^{ゆきと}を籠絡した。

「ふん。元はといえば侑人^{ゆき}がわるいんじゃないか。俺ら以外といちゃいちゃしやがっ
て」

「あ…、あれは違っ……あ……っ！」

弁解しようとした侑人^{ゆきと}の脚の間のもを、蒼太^{そう た}の手が紗^{しゃ}ごしに掴む。

華道の家元の子息とは思えないその横暴さが、侑人^{ゆきと}をさらに怯えさせた。

折檻^{しゃ}のときは紗^{しゃ}の単衣^{ひとえ}の下には何も着ることを許されない。

目の粗い夏物の生地を透かして、侑人^{ゆきと}の白い肌は全身丸見えだった。

「尋問してやるよ。素直に言え。さっき一緒にいたやつとはどういう関係なん
だ？」

「っひ…、あ……！？」

幼茎の先端部分に紗を押し付けられ、その上から手のひらでぐりぐりと微妙な刺激を送られる。侑人は腰をびくんと跳ねさせた。

激しく上下に扱かれるよりもこれは毎回つらくて、すぐに音をあげてしまう。

「ほら、言えよ。言わねえともっともっとしてやるぞ」

「…っああ……っ、や……、あ……、」

腰のびくつきが一回ではおさまらない。

何度も立て続けに腰をわななかせながら、強すぎる快感に侑人は泣いた。

幼茎を押し当てられた紗がじわりと濃く滲む。

「俺も気になるなあ。ねえ、あの子とはいつから知り合いなの？」

蒼太に下を甚振られながら陽太にも低く囁かれ耳殻をやんわりと食まれる。

二人の義兄は本気で自分のことを好いている。

それも執拗に。

侑人が少しでも兄たち以外と親しくする度、このような戯れを強いられる。

「言ったよな。俺ら以外のやつに易々^{やすやす}と近づかれるなって。さっき家の近くまで一緒に帰って来てたあの男子、誰？ やけに親し気だったけど。肩とか抱かれてたしよ」

「っあ…ツ……」

蒼太^{そうた}は侑人^{ゆきと}の幼茎を責め立てながら、もう片方の手で胸の頂き^{いじ}を弄るのをやめない。硬くしこった花芽のような乳首を指の腹でぐりっと^お押し潰され、あられもない声が漏れ出す。

「う……、っあ…、あれはただの、クラスの友達だよ……」

「ふん。どうだか」

侑人^{ゆきと}の言うことは本当だった。

しかし毎度のごとく、蒼太^{そうた}には信じてもらえそうもない。

「とにかく今からお仕置きだ。あいつが何であろうと、お前は言いつけを破って俺たち以外のやつに触れられたんだからな。反省してもらおう」

「っあ…！ いや……っ、」

幼茎を甚振る蒼太^{そう た}の手の動きが烈^{はげ}しくなる。

透明な蜜の溢れる鈴口を親指の腹でぐりぐり^お圧されたかと思うと、竿を紗ごと上下に扱^しき上げてくる。

「っひ……っ、あ、ああ……っ、だめ……っ、だめ……え……、」

紗のざらついた感触が竿全体に押し付けられてたまらない。

「何がだめなもんか。こんなに腰揺らしてるくせによお？」

蒼太^{そう た}の言葉はいつだって酷薄だ。

侑人^{ゆきと}の腰は確かに揺れ動いていた。五年にわたり兄たちに教えこまれた淫猥な感覚は、そう簡単に拭い去れるものではない。少しでも二人に躰を触られれば容易^{たやす}く快感を求め蕩^{とろ}け始めてしまう躰に、侑人^{ゆきと}自身も嫌気がさすほどだ。

「ほらほら。こんなにここ硬くして。だんだん硬くなるの早くなってるよな、侑^{ゆき}。もう達^いちまうんじゃないかねえのか？」

「い……っ、いやあ……っ、達^いくの…、いや……あ……っ」

紗はすでにぐっしょりと濡れそぼり、蒼太^{そう た}の手に扱^しかれるたびちゅこちゅこといや

らしい音を響かせた。

「ふーん、嫌なのか。まあ、そう簡単に達かせてやるつもりもないんだがな」

「っ……っあ……？」

蒼^{そう}太^たの手が唐突に、熱持った幼茎の根元を押さえつける。

にわかになそこを直に紐状のもので縛^{いまし}められ、侑^{ゆきと}人は悶絶しそうになった。

「この状態で俺のをぶち込んでやるよ」

「っ！い、いや……っ！！」

抵抗する間もなく布団に押し倒され、侑^{ゆきと}人は格天井^{ごうてんじょう}を仰いだ。

幼茎の縛^そめに伸ばしかけた両手を蒼^{そう}太^たに捕らえられ、頭上にひとまとめにされてしまう。

「陽^{はるた}太^た、侑^{ゆき}の手押さえててくれ」

「も～。蒼^{そう}くんってば強引なんだから」

陽太^{はると}はそう言いつつしっかりと侑人^{ゆきと}の両手首を掴む。

「侑^{ゆき}。蒼^{そう}くんの番が終わったら、俺が優しく犯してあげるからね」

穏やかな口調でとんでもないことを言う陽太^{はると}。

しかしそんな言葉にも構ってはいられない。蒼太^{そう た}が侑人^{ゆきと}の細い下肢^{やすやす}を易々と割り開き、その間に腰を据えたのだ。勃ちあがった幼茎も小ぶりの玉菊も、その下に息づく秘孔さえも丸見えになってしまう。何度淫戯を重ねようとこんな場所をあばかれるのは恥ずかしく、屈辱的ですからある。

「言いつけを守れない悪い子には、しっかり躰で教え込まねえとなあ？」

蒼太^{そう た}は自らの纏う麻^{ひとえ}の単衣の裾を払う。長襦袢の下から取り出された雄茎はいきり立ち、ただでさえ長大な姿をさらに膨張させていた。慌てて起き上がろうとするも、両手を万歳の形に固定されていて動けない。身を振る暇^{よじ いとま}もなく、布団に膝がつく程に脚を開かされ一。

「あああ……ッ、」

ぬち……っ

という音と同時に、肉環が拵げられ熱い幹^{はい}が挿入ってくる。

「っひ、ああ……っつ、」

何度挿れられても蒼太そうたのものは長大で、圧迫感のあまり背を仰け反らせてしまうほどだ。

「は……っ。さすが誰彼構わず躰からだを触らせるだけのことはあるな。慣らしもしてないのに…なかで絡みついてくるぞ……。よっほどこれが欲しかったのか？」

これ、と言いながら揺るように腰を深められ、躰からだの芯を淫猥な疼きが貫く。こうなると侑人ゆきとの脚は押さえられずとも自ずから下品に開いてしまう。突き入れられた剛直をさらに奥へ誘い込むように媚壁が蠢うごいてしまうのもとめられない。

五年前までは純真な子どもだったのに、兄たちのせいゆきとで侑人の躰からだはすっかり淫乱に作り変えられてしまった。

「なかで達いくのは教えたはずだぞ。前縛られてても達けるだろ？ほら、ほら」

嗜虐的な笑みを浮かべ、蒼太そうたは張り出した雁首を何度も奥に突き当ててくる。

「っああ……っ、あ”♡」

「お前が狂うまで今日は犯し倒してやるからな」